

ノーネス株式会社

インターネットテレビと 新しい時代の市民運動

タブー視されたインターネットテレビ

——本日はノーネス株式会社の代表取締役、平山秀善さんにお話を伺います。

御社の設立は何年ですか。

平山 平成18年(2006)で、同年に「ノーネスチャンネル」というインターネット上のテレビ局を開設しています。

前年からその企画を考えていましたが、当時まだYouTubeが存在していない頃で、たいへん優秀な私の仲間とさえ、絶対にテレビ局には手を出してはいけないと大反対していました。

——インターネットテレビをつくらうと思ったのはなぜですか。

平山 俳優の今井雅之さんが、特攻隊を題材にした戯曲を書いて各地で上演していましたが、今度は自身の戯曲を元に全編英語の映画「Winds of God -Kamikaze-」を撮り、全米でも日本でも公開されました。この映画は俳優がすべて実際に英語で演じています。

さらに、「零の彼方へ〜 The Winds of God〜」というスペシャルドラマをテレ朝系列が制作し、全国放送されました。

私はプロデューサーとして、映画の制作に関わっていません。戦争にまつわる無難な人間ドラマではなく、真正面から戦争を扱うものはどの配給会社も敬遠します。私はまだ30代でしたが、日本民族の歴史を残すべきだと説得して、なんとか配給まで辿り着きました。

それに触発されて、石原慎太郎さんが佐藤純彌監督で「男たちの大和/YAMATO」をつくり、そのあとも数本の同様の映画ができています。

——平山さんたちが映画界のタブーを破ったんですね。さて、それがどのように「ノーネスチャンネル」に繋がるんですか。

平山 要するに、アメリカでは受け入れてくれるのに、な



ノーネス株式会社
代表取締役 平山秀善氏
<http://www.nones.co.jp>

ぜ日本ではこんなに難しいのか。それなら、我々がつづけたものを世界にインターネットで流したほうが早いと思ったのです。

すでに始まっていたYouTubeも当時は投稿サイトでしたが、私はどうしてもテレビ局をつくりたいと、平成18年(2006)に「ノーネスチャンネル」を開設しました。

依頼されて3年後に始まったのが「東京六大学野球オフィシャルTV」で、当時全試合を配信し、早慶戦などを生中継しています。

——インターネットですか。

平山 はい。インターネットによる6大学野球の生中継は、我々が初めてです。明治神宮野球場に光回線を入れるところから交渉して、世界に向けた早慶戦のライブ配信も初めて実現させました。

平成22年(2010)になって、アメリカの「Time」誌から、インターネットで英語の番組ができないかと話が出ました。全米で公開された今井さんの映画を観て、あのプロデューサーにつくらせてみようと思ったようです。ニューヨークにあるTime社の本社で契約を交わして、「GLOBAL INSIDE」という番組を5年間、我々が担当しました。

——どんな内容が多かったんですか。

平山 「Time」誌は週刊誌ですから、毎週、多様な記事が掲載されます。その中から選りすぐりの世界のトピックを、英語と日本語で解説するニュース番組です。

例えばウサマ・ビンラディン、マーク・ザッカーバーグ、イスラエルとパレスチナ、アラブの春やエジプト革命など。シリアやパレスチナの在日大使にインタビューした映像など、貴重な資料も残っています。

——では、御社の「バクロスTV」と「市民メディア」についてお話し下さい。

平山 例えば子育ての中で気付いた添加物や遺伝子組み換えなどについて、ママさんたちが、市民はなぜ地上波のテレビで本当のことが知らされないのかと思うようになり、自然発生的にその疑問がじわじわと広がってきました。そして、長崎市を皮切りに、各地で「市民メディアの会」ができました。

——以前、小誌で、一般社団法人市民メディア連合会の会長さんに登場していただき、市民メディアの会を紹介しています。

平山 ママさんたちの疑問に、日本のテレビはすべて企業が背景にあるからだと答えました。出演者の後ろを通る自動車や映り込んでいるドラッグストアが、番組のスポンサーと抵触しないか、現場ではそんなことばかり考えています。企業のためのテレビですから、視聴者のためにつくるという感覚はあまりないのです。

そこで、皆さんのような市民でもお金を集めれば、市民のためのテレビができるとアドバイスしました。

——それがYouTubeの「バクロスTV」ですね。

市民のお金でつくった市民目線の番組

平山 ママさんたちが、インターネットのクラウドファンディングという仕組みで、本当にお金を集めてきました。それで、私と一緒にバクロスTVを立ち上げました。

ママさんたちが番組の内容を決め、私がプロデューサー兼キャスターで番組をつくります。今では視聴回数が150万回を超えました。視聴者数はその半分としても、全国の60万人から70万人になる計算です。

——皆さん、どのような形でその動画を観るようになるんですか。

平山 YouTubeにはお勧め動画を表示する「レコメンド」という機能があり、例えば食の安全、子供の薬、健康などで検索すると、バクロスTVの番組が出てきます。さらに、それぞれシリーズになっているから、どんどん観てしまうわけです。

もっと多くの人に観てほしいということで、NHKの子育て番組に長く出演していたお笑いタレントのくわばたりえさんに声をかけ、出演してもらったこともあります。

——出演料はどのくらいですか。

平山 もちろん、きちんと支払っています。

ママさんたちと、お笑いタレントの長井秀和さん、専門家のお医者さんも入れ、私がキャスターとして進行する番組もつくりました。

ある程度ブレイクすると、市民メディアの会がマスコミに注目され、地上波の長崎放送(TBS系)で特別番組が放送されました。

さらに、東京ローカルのMXテレビ(TOKYO MX)に我々の企画を持ちかけると、ある番組のコーナーで、バクロスTVがつくった動画を放送してくれました。

——それはどんなものですか。

平山 種子法をテーマにした「未来のタネ」という動画です。ママさんたちと、ゲストとして元・農林水産大臣の山田正彦さんに出演していただき、私がキャスターを務めました。

それから、どんどんバクロスTVの人気が出てきて、地方のママさんたちが地域の課題を取り上げ、勝手に番組(スピンオフ動画)をつくり始めました。それが150本ぐらいになり、6000回から8000回も観られるようになっていました。——地方の話題が全国で観られるんですね。

平山 全国のママさんたちが共有する課題だからでしょう

ノーネス株式会社

か。この3月上旬には鹿児島テレビ（フジテレビ系）の取材を受け、我々の市民活動が放送されました。

面白いのは海外でも観られていることです。例えばアメリカ在住の日本人からもメッセージが届きます。

そのうち、「市民がお金を出して番組をつくるってどういうことだ。制作者に会わせてほしい」と、飛行機に乗ってやってくる人が出てきました。まずアメリカのオレゴン州、それからドイツのミュンヘン、フランクフルト、アジアの人など。

——海外にはあまりないものなんですか。

平山 アメリカにモデルがあって、真似をしているならあり得るのですが、日本人が世界に先駆けて始めたことだから、面白いのです。

——日本人だから意外なんですか。

平山 日本から生まれたムーブメントが海外にも伝わって、今やイギリスのロンドンにも市民メディアの会があります。ママさんたちが、例えば現地でブレグジット（EU 離脱）がどうなっているかなど、ロンドンの今についてママさんたちの目線で番組をつくり、バクロス TV にアップしています。

それらは、アメリカのニュースチャンネル CNN や「Time」誌の目線ではなく、ママさんたちの市民目線でつくられています。

ママたちがお役所を動かす「市民立法」

——今後、どのように発展されますか。

平山 私が15年前、周りに反対されながら始めたインターネットのテレビ局がビジネスとして成り立つ可能性が出てきました。

将来的に、テレビ局と戦うのではなく、キー局とタイアップして、今までの企業テレビではできなかった番組を、市民のスポンサーによってできないかと考えています。そうなれば、食品添加物のこと、原爆や東京大空襲のこともきちんと放送できるでしょう。

今まで知らされていない情報が一気に解放され、圧倒的に社会が変わるかも知れません。

——その市民運動として、もう一つ大きな動きがありましたね。

平山 令和元年（2019）に「ママエンジェルズ TEAM2600万」という組織が立ち上がりました。ママさんたちと、議員立法ならぬ「市民立法」をしようと考えたのです。私はチェアマン（代表）を引き受けました。

市民が発議し、官僚及び大学教授などの専門家と勉強会・審議会を重ねて、答申・報告書をつくり、大臣や知事・市長に渡します。それを元に委員会で法案・条例案にして、国会や市町村議会で決議されるという流れです。

過去の市民運動は署名やデモでしたが、この市民立法という新しい手法も成り立つのではないかと考えています。

——官僚を巻き込むのはたいへんですね。

平山 じつは法律や条令の多くは課長級でつくっています。課長が原案を決めて文書をつくり、どんどん上に上げていくわけです。私はそれをよく知っていましたから、ママさんたちにアドバイスすると、では直に課長に会いましょうということになりました。

その活動は、まだ1年たたないうちに、なんと158か所にも及びました。

——どんな事例がありますか。

平山 例えば東京都葛飾区では給食の審議会ができ、神奈川県では食品表示の担当課と勉強会を開いています。また、埼玉県で家畜の疫病が発生したとき、すぐにママエンジェルズのメンバーが県庁の畜産課に行き、状況説明を求めました。栃木県では食の安全を協議するため、県庁の農政課長と会っています。

まだ、法律や条令をつくるまでには至っていませんが、実現する日はそれほど遠くないと思っています。

——種子法（主要農作物種子法）や種苗法もずいぶん勉強されていますね。

平山 平成30年（2018）に種子法が廃止されたあと、農林水産省にお願いして、番組をつくりました。ママさんたちが担当の課長さんたちに質問して答えてもらうという内容です。

その後、種苗法改正が国会で審議されることになり、ママさんたちは種苗法も勉強したいと言い出しました。そこで農水省と協議し、担当課長さんたちの説明とママさんたちの質問に対する応答をぜんぶ収録することにしました。

種子法のとくと違って、国会審議の前ですから、役所の人員も資料もフル装備です。ママさんたちも全国からやってきて、食の安全に対する疑問、表示の要請など、その場できちんと述べています。

——ママエンジェルズも、市民メディアの会と同じような、横の繋がりはあるんですか。

平山 スーパーバイザーを通して、逐次連絡を取り合い、例えばある県で官僚が難色を示したとき、あの県もあの県もできているのに、なぜここではできないのかと言えるわ

けです。

役人は前例が好きですから、受けざるを得ません。これだけの全国組織になって、各地に前例があるので、逃げることはできないのです。

——なるほど。大きな力になりますね。

日本がおかしくなるという感覚があった

——この活動を率いておられる原点、平山さんのプロフィールを伺っていきます。ご出身はどちらですか。

平山 生まれも育ちも東京都です。父は千葉県にある学校法人中央学院の理事長を務めていましたが、私が小学生のときに大病を得て長期の入院をしました。

中学校3年から高校2年まで、学校が終わってから、弁当工場で働きました。勤務時間は夕方の4時半から夜の9時半で、ずっと立ち仕事です。白い服に着替えて、時間給のタイムカードを押します。正月もクリスマスも、弁当工場に泊まり込んで働いたのを覚えています。

——高校卒業のあとは、どうされましたか。

平山 そのまま弁当工場で働かないかと言ってくれましたが、高校生のときに音楽関係の仕事もしていたので、その流れで芸能界に入り、テレビにも少し出演していました。

その頃、父が闘病の末に病気を克服して家に戻ってきました。私の様子がふらふらしていると見たのが、専門学校ぐらい行っておけと言うのです。

——なぜ音楽の道を選んだんですか。

平山 じつは高校1年生のときから、近いうちに日本がおかしくなるという感覚がずうっとありました。しかし、アメリカでは「We Are The World」やジョン・レノンの楽曲、「ライヴアイド」というチャリティーコンサートなど、音楽を通じて直に大衆に働きかけていました。これほどスピーディに伝搬できるものは他にないと感じたのです。

ところが、日本では歌謡曲の歌番組が全盛で、音楽という手段は難しいと思いました。それで、他のルートで日本を変えてやろうと思い、父の言う通り、学校に行くことにしました。

受験勉強を全くしていなかったのですが、なんとか夜間の2年制短期大学に進むことができました。

——働きながら通ったんですね。

平山 夕方の5時45分から授業が始まります。

たいへん成績がよかったです。理事長先生から4年制大学の編入試験を勧められました。いくつか受験してぜん



ぶ合格し、明治大学の経営学部を選びました。

大学でも熱心に勉強し、優が50個以上もある成績でトップでしたが、学生総代にはなれませんでした。事務局に尋ねてみると、編入学生という理由で、最初から対象に入れていなかったようです。別に総代になりたかったわけはありませんが、疎外感いっぱい、たいへんがっかりしたのを覚えています。

——抗議をしなかったんですか。

平山 いくらか大人になっていましたし、在学中に慶應大学ビジネス・スクール（KBS、慶應義塾大学大学院経営管理研究科）を受験して合格していましたので、そこでしっかり勉強しようと決意しました。

私がKBSに入学した平成4年（1992）は、細川護熙さんが日本新党を立ち上げられた年です。

KBSの同級生で、今は慶應大学総合政策学部の教授になっている飯盛義徳さんは、佐賀県の出身です。同じ九州の細川さんを「熊本県の偉人」と言っていたいへん尊敬していました。飯盛さんの勧めで、私も細川さんについてよく勉強したものです。

——政治に関心を持たれるわけですね。

高校生のときから、日本がおかしくなるという感覚があったようですが、どなたか身内の方に影響を受けられたのですか。

平山 じつは私の祖母の弟、いわゆる大叔父は川島正次郎です。

——自民党草創期の副総裁で、当選14回の大政治家で

ノーネス株式会社

すね。

平山 父が理事長を務めた、中央学院大学の創設にも携わっています。大叔父は自分の子供を少年期に病気で失っていることもあって、父をよくかわいがってくれました。大叔父とおつきあいのあった中島飛行機の中島知久平さん、東京市長になられた後藤新平さんにも、かわいがっていただきました。

——川島さんのDNAが受け継がれているんですね。そのお話は後ほどまた伺います。

多くの人材を輩出した学生塾の発端は

平山 平成5年(1993)になると、小沢一郎さんが自民党を出て、新生党を立ち上げます。小沢さんを見て「なんと面白い。あの人はロックンローラーだ」と思いました。

連立政権与党となった新生党が、我々学生を数百名集めてパーティを開くという計画がありました。しかし私は学生の代表に対して、そんなことより、細川先生、小沢先生が考えている理想の社会をつくるために、我々学生の中からたった一人でも指導者を輩出するほうがいいのではないかと言いました。

しばらくして、また学生が集まり、その場でみんなが「その方針で塾をつくらう。平山さんが代表を引き受けてくれ」となって、「新生党学生塾」をつくりました。

——党の公認だったんですか。

平山 いいえ、勝手に名乗っただけです。党の主導ではなく、我々のほうから自然発生的にできた塾ですが、我々の存在を党に認めてほしいとお願いしました。

党と連結させれば、大臣の生の姿、現場の日々の姿を隣で見ることができると思いました。生活を共にしながら、報道でいくら叩かれても決断しなければならぬ大臣の難しさ、厳しさを知って、足りないところがあれば我々が埋めるのだと。

塾の公認を求めて、3か月間ぐらいは、秘書会や代議士会で頑張っていました。秘書会にいた佐藤公治さん(後に国会議員)に「俺が通してやるから、少し静かにしてくれ」と言われて、無事に新生党学生塾ができました。

——そこから議員になられた方もおられるんですか。

平山 小沢一郎事務所、小池百合子事務所などに入って、国会議員になった者もいます。それから、県議会議員、市議会議員もたくさん輩出しました。東京都の葛飾区議会では、後輩が、ママエンジェルスの課題になっていた給

食について質問してくれたこともあります。

新生党学生塾設立から、ここまで来るのに、27年かかっているわけです。

——ノーネスチャンネルやバクロスTV、ママエンジェルスの原点がそこにあるんですね。

平山 私の今の姿は、やはり細川護熙さんや小沢一郎さんの影響です。高校生時代から日本を心配していた青年にとって、大学生といういちばん多感な頃に、あの方たちと少しでも一緒にいられたことはたいへん大きい。

——さて、大叔父の川島正次郎さんについてもう少し伺います。

平山 じつは川島のことは皆さんに話していませんでした。26年経って、先ほどの佐藤さんに打ち明けたら、たいへん驚かれていました。

——川島さんは自由民主党結党の立役者のお一人ですね。

平山 65年前のいわゆる保守合同で自由民主党ができたときの閣僚で、初代総裁は鳩山一郎さん、後に幹事長、副総裁を務めます。日米安全保障条約の改定、いわゆる日米地位協定の締結、沖縄返還の内部交渉などの仕事をしました。

——平山さんの父上も、川島さんと深い交流があるんですか。

平山 子供が少年期に亡くなるので、川島は私の父もよくかわいがり、長じて経済担当の秘書にしました。今と違って、大きな額のお金を預かったり動かしたりすることもあったので、身内を置いたわけです。

岸信介内閣の安保改定を巡って、あまり知られていない話があります。岸さんは「解散すれば勝てる」と主張し、川島は「状況から総辞職」と主張しました。結局、岸さんが辞任し、川島の暫定政権という話になりました。しかし、その必要はないと言って若い池田勇人さん呼び、池田内閣ができます。川島はそこでも副総裁になり、引退まで副総裁を務めました。

——貴重なお話をお伺いしました。

平山秀善さんは、川島正次郎さんのDNAとともに、ご自身の感性で、新しい時代を切り開いています。今後のご活躍も大いに楽しみです。

本日はありがとうございました。

(聞き手:SSA理事長久保田ようじ)